

食をことばする

| | |
|-----|---|
| 著者 | 八杉 佳穂, Yasugi Yoshiho, ヤスギ ヨシホ |
| 雑誌名 | Vesta : 食文化誌ヴェスタ |
| 巻 | 77 |
| ページ | 2-3 |
| 発行年 | 2010-02-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/4584 |



食を ことば する

国立民族学博物館教授

八杉 佳穂

やすぎ よしほ

Profile

1950年生まれ 広島県出身

専門分野●中米言語学

著書●『チョコレートの文化誌』、『マヤ文字を書いてみよう 読んでみよう』、『マヤ文字を解く』、他

「食べる」を英語の辞書で引くと banquet, bog, champ, englut, engorge, feed, glump などたくさんの語彙が出てくるが、一般的に「食べる」として使われる動詞は eat である。しかしスープリは飲むものではなく食べるものといわれるように、日本語の「食べる」と eat は、その意味範囲が違う。言語はコミュニケーションの手段で、互いに理解し合うためにあるのだが、同じような意味を表わしても、異なるところがいろいろある。笑い話ですむ場合はいいのだが、深刻な誤解を生む場合もあって、日頃なにげなく使っていることばも、なかなか問題を多く含んでいる。

スペイン語の辞書を引くと comer という一般的に使うことばの他に、desayunar (朝食を食べる)、almorzar (昼食を食べる)、cenar (夕食を食べる) と引いたことばが出てくる。これらは、desayuno, almuerzo, cena という名詞を動詞化したものである。名詞を動詞化するとはなんと不思議なことをすると思ってしまうが、日本語でも「夕食する」とか「お茶する」ということばが一般化しており、それほど変でないこと

かもしれない。そのほか tomar も用いられるが、「取る」というのが原義のようである。それは食べ物ばかりでなく飲み物にも使われる。ちなみに「飲む」場合は beber という専用のことばがある。

これらは西洋のことばの例であるので、よく知られた常識的な部類に入るのであるが、マヤ諸語のたとえばツェルタル語では、肉を食べる場合は *ruj*、脂やどろどろして軟らかいものは *ro*、豆など堅いものは *ruj*、トルティリヤやトウモロコシでできたものは *we*、サトウキビなど吸うものは *ruj*、キャンデーなど口の中で溶けるものは *butz* と言って、食べるものの違いで動詞が異なる。こうした違いは中米諸語にみられる特徴の一つである。

日本語は動詞による区別をあまりしない言語である。先に英語の語彙をいくつか挙げたが、それらの違いは、「がつ食べる」とか「ばりばり食べる」とか違って、副詞をもちいてその違いが表現される。

では日本語では「食べる」という動詞だけなのだろうか。「いただく」、「召

しあがる」ということがある。「食う」「食らう」ということは「ぞんざいな言い方」と広辞苑には出ている。これらは相手との関係によって使い分けられることばであり、日本語は相手との関係によって語彙を発達させたということができそうである。

日本語では「食べる」は一つしか漢字が思いつかなかいけれど、「のむ」は「飲む」と「呑む」がある。食べ物でふと思いついたが、「胡麻をする」という言い方をする。この「する」ということばは、「金をする」のにも「墨をする」のにも「版画をする」にも使われる。それを漢字にすると、「摩る」「掏る」「擦る」「刷る」などで区別されるのだが、どの漢字を使っているのかわからないことがしばしばおこる。漢字はいうなれば中国語での区別を表わしている。一つ一つの行為を別の語彙で表わしている中国語とは違う見方を日本語はするのだから、迷うのは当然である。

マヤ諸語で食べ物の違いで異なる動詞が使われるのは、たいへん珍しいと思っただけで、考えれば、動作を細かく区別する点において、中国語(漢字)

もよく似ている。もっとも中国語では「食べる」は「吃(喫)」であり、食べるものや食べ方によって違うことはない。マヤ諸語と同じというわけにはいかない。そう簡単に同じとか違うとかの判断をさせないのが言語のおもしろさであり、難しさである。

人間、関心の深いところは、細かくことばで区別するものである。中米で主食となるものは、トウモロコシである。だから当然いろいろな語彙がある。トウモロコシは新大陸が原産である。だからそれにあたる語彙はスペイン語にはなかった。新しい事物は、現地語から借用している。それもほとんどがアステカ文明のことばであるナワトル語である。しかしトウモロコシのスペイン語となったマイス *maiz* は、コロンブスが最初に出会った西インド諸島のタينو語から借りたものである。メキシコのスペイン語では、若いトウモロコシは *erote* というが、それはナワトル語の *erote* からきている。ナワトル語では、それより前の若芽のまだ粒が出そろわないときは *centli* といい、収穫して乾かしたものは *centli*、トウモロコシ

粒は *tlaxalli* など、トウモロコシは主食であるため、出来具合のそれぞれの段階に語彙がある。

トウモロコシの粒を石灰水に一晩浸して石臼ですり潰して、クレープ状にしたものを平たい陶板で焼いて食べる。トルティリヤであるが、ナワトル語では *tlaxcalli* という。ひいた粉を団子にしてトウモロコシの葉で包んで蒸したものはタマルであり、水に溶かして飲むものはアトレ、肉などを入れてポタージュ状にしたものはポソレとナワトル語から由来したことば (*tamalatlilli pozolli*) であふれている。中米のそれぞれの言語で語彙は異なるけれど、こうした区別は同じである。

世界でどのような違いがあるのかわからないが、食べるという一つの動詞からでも、言語によって世界の区切り方が違うことがわかる。大げさかもしれないが、世界の見え方が違う。それは文化や民族の違いとなって現れる。本特集では、民族によってものの分け方や見方、考え方が違うことを、食のことばから探ってみよう。